

名寄の音に耳をすませて

帯での暮らしが始まりました。毎日が驚きの連続でしたが、その中でも特に印象深く感じたものの一つが、この町の「音」です。

最初の思い出は「雪の音」です。前任の先生から、雪の音が違うことを教えて頂いていたので、とても楽しみでした。「しんしん」と雪が降る様子を表す言葉は知っていても、これ

まで暮らしてきた土地とはまるで違う静寂に包まれる感覚は、新鮮なものでした。

神沢利子さんの絵本『ぼとんぼとんぼ』には、冬ごもりをする熊の親子が、外から聞こえてくるさまざまな音に耳を澄ませながら、春の訪れを感じていく様子が描かれています。

中、さらさらと舞い落ちる雪。雪を踏みしめたときの音。そして春には、雪解けのしずくが「ぼとんぼとん」と落ちる音。

まるでその絵本の中にいるような、北国ならではの「音の世界」を味わうことができました。

季節が変わり、ミズナラの原生林が残る名寄公園を愛犬と歩けば、さまざまな鳥のさえずりや、木々を渡る風など美しい音に包まれます。

一方、驚いた音は、正午のサイレンです。初めて聞いたとき、私には災害時の緊急避難を知らせる



「サウンドスケープ（音の風景）」として捉え、聴くことの大切さを問いかけてました。自然豊かなこの地域では、耳を澄ませることで出会える、素敵な「音の風景」があります。

これからまだまだ、どんな音に出会えるのでしょうか。とても楽しみます。

カナダの作曲家R・マリー・シェーフは、私たちを取り巻く音の環境を

社会保育学科教授 三川幸幸

とに気づきます。

去年、大学に着任し、初めての豪雪地